宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 代表26番
定価一年送料共 500円

錦秋を飾る献茶祭と奉納舞

―境内を埋めた表千家同門会―

千宗左家元・井上八千代家元奉仕

十月十七日、当社本殿において表千家家元（千宗左氏）の献茶式並に井上流家元（井上八千代氏）による京舞（倭文）がそれぞれ厳粛且つ盛大裡に奉納された。

当日は秋晴れの好天に恵まれ朝早くから両家元の御点前と奉納舞とを拝見しようとそれぞれの御弟子さんを始め関係する人々が参集し午前九時頃までには本殿前雨儀廊の中に設けられた一般参列席は溢れんばかりの人数となった。

午前十時、両家元が御弟子さんと共に当社に到着、直ちに勅使館貴賓室に於て出光佐三氏を始め各関係者、並びに当社職員と親しく会談の後、更衣を整え十時五十分、勅使館より当社職員の先導、出光佐三氏、葦津権宮司の案内により参進、手水舎で心身を清め、祓舎にはいり、お祓の後、本殿に参入された。

午前十一時、献茶式、奉納舞の祝詞奏上に続き、先ず千宗左氏による献茶式が執り行なわれた。

宗匠の静かな袱紗さばき、流れるような所作に参列者には寂として声なく一様に身体を乗り出す。

続いて井上八千代さんによる京舞（倭文）奉納、師匠の一糸乱れぬ動作、静と動とが一体となった名手の舞ぶりに一同時の経つのを忘れていた。

参列席からはシャッターの音がきこえる。

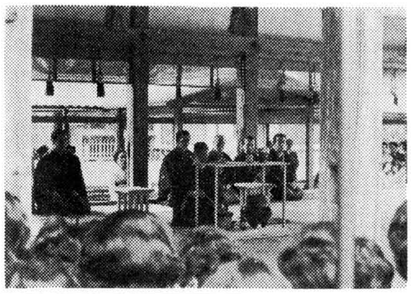
奉納を完えた両氏は玉串奉奠を行ない勅使館で休息の後午后三時、関係者が見送る中を両家元は神社を離れられた。

例年の行事となっている献茶、奉納舞は以上の式次第によって無事終了を見たことは関係者各位の御協力によるものと深く謝意を表したい。

井上流について記すれば、

日本舞踊の中で京阪地方を中心として発達した舞踊を上方舞と呼ぶ。これらは能を基盤とした、地唄による静的な座敷芸と考えられる。なかでも京舞井上流は特異な存在で、初代井上八千代が近衛家に伝わる舞を基盤にして高雅な舞をつくり出し、三代目八千代氏の努力によって能楽、人形浄瑠璃、歌舞伎からの長所をとり入れて完成せられたといわれる。

倭文は別題（大和文）とも云い津山検校作曲、三世八千代振付、井上流の許しものの一つで、扇の他に鈴を使う、



天照大神の岩戸開きの故事を唄ったもので舞の方も丁度中ほどの合の手事に三番叟の鈴之投の型を取入れ、神楽の囃子に乗って鈴を打ち振り舞う。細かい手振りとはっきりした間、そしてお祝の意味のきりりとした雰囲気がこの舞の特色で、ものの始めという事で、毎年祇園女紅場の始業式に家元が舞うことになっている。

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市吉塚一丁目三番二号（〒八一二）
電話 福岡（〇九二）六五一―九四五六番
本社 京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一―三三四一（代）～四番
三五一―一三三四・六〇六六番

遷宮記念大祭

奉納剣道大会

十一月三日文化の日、第三回宗像郡剣道大会が玄海小学校体育館に於て行われた。

昨秋十一月十一、十二日、当社未曽有の遷宮祭を記念して本十一月一日より、既報の如く大菊花展を始め諸種の行事が二十日迄計画されその一環の行事である。

前日の雨で境内は湿が残り尚早朝雨模様の天気のため、急遽玄海小学校体育館へ会場が変更された。

郡内各地区より集った豆剣士から一般に至る参加選手は、二八二名、加えて多数の父兄の声援で会場は熱気溢れるばかりであった。

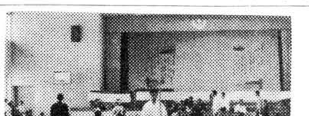
きびきびした試合態度。剣道は礼儀に始り礼儀に終るといわれるとおり日頃の腕白坊主も礼儀正しく動作をし父兄達は感心しきりであった。

四人抜、六人抜、十三人抜きと次々に白熱戦が続き、優勝者が渾沌として最后まで判明せず場内を大いに涌かせ、午后三時半に無事終了した。

試合成績は左の通りである

小学生低学年の部
優勝　石松康弘　河東小二年
二位　矢原吉房　玄海東小二年
仝　中学年の部
優勝　熊谷浩文　河東小四年
二位　松本泰明　玄海小四年
仝　高学年の部
優勝　米厚茂光　福間小六年
二位　白木　彰　赤間小五年
中学生の部
優勝　小樋康文　津屋崎中二年
二位　木藤裕司　中央中一年
一般の部
優勝　田中義裕　玄海町
二位　馬奈木隆雄　宗像警察署

以上



御礼

昨年の遷宮を記念して斎行しました遷宮記念奉納剣道大会には、関係役員並びに崇敬各位の御協賛をいただき盛大に執り行うことができました

ここに厚く御礼申し上げます

宗像大社々務本局

論説

改造家旧事記

―讃岐の非常人㈠

テレビ放映の人気番組は、脚本に登場する主人公の事蹟探求、ひいてはその人柄追慕を誘うことがある。人物はもとよりその活動地域の宣伝のために放映していないでも、その視聴効果たるや実に驚くべきものがある。茶の間に歴史談義の花が咲く夜があっても不思議はない。

忠臣蔵を放映すれば赤穂近辺の交通機関は訪客に賑い、柳生剣法をテーマにすれば草深い里に急性ファンが集う。NHKが先程連続放送劇として「天下ご免」と題して、平賀源内の行状記を展開した。ところが、讃岐の出生地が急に物好きかひま人の関心注目を引いた。脚本は文字通り一躍脚光を浴びるに至ったのである。

源内上映が高松観光の提灯持ちをするつもりで始まったのでもあるまいが、生家所在地の駅は乗降客の数量急増、現代人のレジャーブームと珍しさを追う風潮をここに吸引した観がある。

彼の生家を持つ町は、観光客誘致の好資源としてかねてからPRをやっていたようだが、テレビに映されるや急に力こぶを入れた。交通公社や食品宿泊業者も見逃す筈がない。その位置が今連続放映中の新平家物語でやがて出番になろうと思われる屋島の至近距離、源内の知友杉田玄白が非常人と評した記録があるが、玄白自身非常の変哲医学者であったので、非常人に非常と言われた地下の源内後世の観光資源になるための生涯だったとは、と苦笑していることであろう。

その点平家の公達や源氏の荒武者にまつわる事蹟も、血涙の地変じて遊楽の場になって、奢る平家の名声は現代人の間に久しいものがあろう。古い文句の桑田変じて滄海となるとは反対に、それとは似てもつかぬ時代風潮の変転によるものである。

こんな感懐に耽けりながら、去る日四国路を旅した。ミニ時代の今も八十八箇所巡りの遍路姿は残っている。高松港で琴平電鉄に乗り換える。約十分で屋島駅。すぐ前に登山ケーブルが見える。ここに下車して宿泊。翌朝源内の出生地志度駅に向う。屋島駅から約十五分で着き、下車して約三百米のところに、平賀旧邸と銅像その向い側に真覚寺と称する寺院があった。まず舗装した幅五米程の狭い道路を距てた山門をくぐる。遍路気分に誘われたわけでもないが、源内の居ない旧邸や銅像よりも路上から境内の美しい老松が目について心引かれたからである。何の変哲もない古風な本堂は、沿革の古さを物語っている。同時に樹齢五百年を誇る岡の松と呼ばれる老松が寺の歴史の年輪を誇っているかのようである。

高さ七米、樹幹の周囲八米、樹蔭三百坪と誌され、まさに無類のみごとな美しさ。松風有清音と書かれた茶室の一幅の真姿が、この松下を過ぎる微風と感じた。

恐らく源内が四方吉と呼ばれた幼少年時代にこの松陰で遊んだことであろう。そして成人後、宝暦明和安永と続く幕府の田沼意次時代に活躍し、自ら風来山人と号した変哲非常ぶりは、幼少からここに養われたであろう。銘木岡の松が一世の奇傑平賀源内その人の俤を、今もなおとどめているような気がした。

彼は享保十四年（一七二九）に生れた。父は高松藩の足軽であった。足軽の子は足軽にしかなれない。その文字が示すように、一人前の武士とは取扱われない軽輩で、藩の雑用に駆使されて極めて低い俸給しか与えられなかった。当時の常識は、いかに才智に優れ学徳を身につけても、十分上位の子弟が愚物であろうと膝を屈しなければならない。よほどの好機に恵まれない限り、生涯貧しい軽輩に甘んじなければならなかったのである。彼の藩内また江戸の生活態度には、旧弊えの反骨が屈従を許さず、折にふれて爆発したと想われる。

改造家の夢は、一身一家の栄達は望まなかった。平時の非常人の懐く理想は、庶民の生活を少しでも豊かに幸せにする念願から、描きはじめられたのである。足軽改造家は、単なる反抗児として、庶民の生活から甚しく遊離した非常人に終始したのではない。

阿蒙少言

稔りの秋は人間界では結婚の秋でもある。嬉しい当人達、挙式の蔭に泣いて堪えているのが父親。結婚行進曲は娘を手塩にかけて育て、今日他家に嫁がせる父親にとっては、父性愛悲曲とも聞えよう○母親にしても掌中の玉を手離す気持は父親と同じだろうが、時期を失して良縁が得られぬ場合の嘆きを想えば、いつまでも膝下においておけないあせりがある「宅の主人が勤めから帰ってきた時、留守中に持ち込まれた娘の縁談を話しかけると、皆まで聞かぬうちに不機嫌になって叱ります」とはある妻君の述懐。世間にはこの傾向は多かろう○わが娘を妻にして楽しそうに新婚旅行に出かける婿を見ると、憎くてたまらないと云う父親もあった。そんな気持も多少動いたが、新家庭を折々のぞくようになって娘より婿の方が可愛くなったと話す別の父親もいた○父親の愛情があまり気にかけぬままに、娘の婚期を失する。気がついてあわて出し親籍友人に泣きついてもどうにもならない「買い手がある間に、未練残さず売ってしまえ」と遠慮のない友人が勧告することもある○次に縁談の障害になるのが、家格財産相性などにこだわること。相性に至っては、まことに当世愚にもつかぬと笑われても仕方ない「万物の霊長が戌年だから申年だからと、動物の性質を取り入れてはナンセンスだ。世界中の夫婦に相性万点のものはいない。喧嘩をしつつ二人三脚の宿命の糸につながれて墓場まで」と相性談義に水を入れると「断る口実だ」と裏話が返る○困らせられるのは三十過ぎた娘を、どこかえ世話してくれとの注文。案外これが多いのに驚く。はては持参金をつけると言う。気骨のある男なら、その一言に手を振るに違いない。（白雲）

第三六回 宗像大社歌会詠草

毎月十五日〆切　詠草到着順

福岡　江崎琴子
一日のいのちなりしか野牡丹の紫包ふ花びら拾ひて

津屋崎　麦野時雄
熟柿照る日に映えて甘美さを誇るが如く累々と成る

久留米　篠田太郎坊
臨終の父に子等が縋り泣く幼なきほどが切なかりけり

大井　吉田和子
蝦夷の地のアイヌが編みし卓敷にコスモス一輪秋の日射しに

津屋崎　占部由久
幼時たのしみ待ちし田島放生会老ひて病床に懐しみ憶ふ

宮田　片山朔子
勤めより帰へりて嫁は我が額に手を当てくるゝ熱は如何と

光岡　河村久光
悲しみは遥かな空ゆ生れきて輝く野辺に蝶の飛ぶ見ゆ

東郷　藤崎辰子
壷に活けし夏萩の花乾きゆくその紫に色は増しつつ

田久　立花勇雄
夜半に醒めて老ひの行末案じおり鳴く虫の音に哀れさの増す

深田　中野節子
蓮田続く野をゆくバスの窓外に白木槿咲く農家も親し

曲　天野トモヱ
青空に一際こゆし許斐嶽コスモスの群咲くわが庭に見る

徳重　石松やす子
秋風に病葉の舞ふ庭すみに野菊は高き香はなてり

田熊　鷲津かつ代
巻く霧は晴るるともなし秋きざす由布岳の秀(ほ)をひと日かくして

名残　竹原圓
山の手の社宅に住みて定年を近き人なり菊をつくれる

田島　吉武武雄
冴え来り明日迫りし此の短歌妻も眼ざめていぶかしげに視し

勝浦　永島文子
街路樹の落葉一片生物の如く自動車の前をよこぎる

田熊　吉田博子
うるむ眼で床に臥たる友思い訪い得ぬことを朝な気にやむ

田久　小方実
トラホーム病みゐる孫が遠くよりプールの中の騒ぎ見ていつ

武丸　立石ろせの
二三十分間の花の命を終りたる稲の花粉は水に漂ふ

吉武　早川須磨
菅あまたつけたる菊をかこむごとこゆきみどりの葉群日に照る

吉留　伊豆仁江
つゝがなく改築成れと祈るかいありてぞ続く秋日和かな

宮田　片山一
眼交の山容一日めまぐるし雲の流れに日さし動けば

武丸　原田リノ
うしろよりつきてゆきつつさびしかりこの子も娶り去る日きまりて

八幡　佐藤孤舟
あでやかな紅葉色づく宮の森詣づる人の足をとじむる

福岡　麻生初栄
学び舎に戻りたる息の夜具をほす庭にほのかに休臭のして

戸畑　田中ハツセ
雷は遠く小さくなりゆきて陽のさす空に淡き虹たつ

吉武　白木うめの
如何になる日本列島か田中氏の改造論はかけ声太し

宗像　中村幸
おだやかな潮なりきこえ海上へ鷗十四、五羽朝空をゆく

津屋崎　菱花女
ありし日はいさかいもせし事ありき亡くてぞ友の恋ひしかりける

大井　安部重郎
肩寄せて読む娘の便り姉妹のさがそれぞれに文の上にも

大井　安部静子
夫とともに植えし檜の露とめて朝の散歩に我が丈しのぐ

田島　有吉唐水
船は今博多の港離れたり汽笛身にしむ晩秋の朝

御造営記録映画―完成
「宗像大社昭和の御造営」

昨年の遷宮を機として、当社の映画が続々と製作された。既報の通り、NET「神々の音を求めて」TNC「神ノ島―生きている日本の祭り―」宗像大社復興期成会・RKB映画社製作「神々はよみがえる」の三作品で、昨年迄に完成されたもの。いずれもテレビで放映され、好評であった。NET「神々の音を求めて」は、沖ノ島の自然、高宮斎場をめぐって、古代の音楽とは何かを、黛敏郎が独特な調子で解説している、宗像大社を中心とする古代音楽の旅といえるもの。TNC「沖ノ島―生きている日本の祭り―」は、沖ノ島の四季の風景、宝物、数々の宗像大社の祭り等祭りを中心とした作品である。RKB映画社制作「神々はよみがえる」は、この度の復興を機に、歴史的立場から宗像大社の緒を明らかにして、お社の姿を一般の方々に理解していただくために企画された作品である。去る十月下旬、これ等に続いて御造営記録の映画が完成した。

タイトルは「宗像大社昭和の御造営」で、復興期成会・GPプロダクション制作、カラー作品で上映時間は二十八分三十秒である。

宗像大社の造営が、神社史上稀な二ケ年という短期間に、速いテンポで行われた様子がこの映画によって手にとるように理解できる。

内容は

沖ノ島の沖津宮、大島の中津宮辺津宮の概観、昭和四十四年八月

海の正倉院
「沖ノ島」刊行さる
―毎日新聞創刊百年記念事業―

この度、毎日新聞社は創刊百年記念の出版事業として、海の正倉院「沖ノ島」を出版した。

本書の企画は、宗像大社及び出光美術館が行い、編輯を毎日新聞社が担当した。

体裁は紺色の表紙、B4版、二四八頁豪華本である。一五六頁にわたってカラー写真が収録され、孤島の祭祀遺跡のすがた、採取された遺宝、沖ノ島の自然などが詳細に紹介されている。後半の七七頁は、斯界の権威による論集。

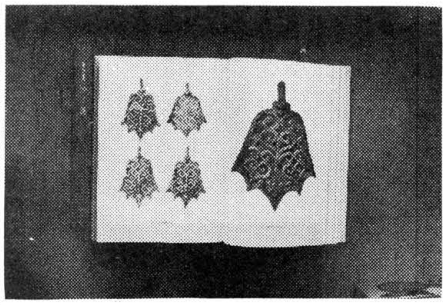
沖ノ島の素顔（毎日新聞社学芸部）、宗像大社の歴史（小島鉦作）、日本古代の祭祀遺跡（大場磐雄）、金銅製の龍頭（杉村勇造）、沖ノ島出土の唐三彩と奈良三彩（小山富士夫）、沖ノ島の船載品（三上次男）、沖ノ島出土の紡織具（大日方克己）、沖ノ島祭祀遺跡調査の出発（鏡山猛）、沖ノ島祭祀遺跡の再調査の意義（岡崎敬）、沖ノ島祭祀遺跡の沿革などが収録されており、明快な学術書としても注目される。

沖ノ島は、古代日本と朝鮮、中国とを結んだ「海北道中」の道標として玄界灘の真中にあり、古来より神の島として聖域されている。

神聖視されている沖ノ島は、昭和二十九年度第一次調査から昭和四十五年度までの第三次にわたる学術調査により、数千点の神秘のベールを脱いで素顔をみせる。沖ノ島出土の御神宝はすべて収蔵されているが、特筆されることは海の正倉院と呼ばれるように、古代大和朝廷が種々の困難をのりこえて、海外文明を摂取していたことを顕著に知ることが出来る点宝が多い。例えば、漆ペルシャのルリ碗、四十数面にのぼる数々の出土品は、美術品としても高価なものである。

祭祀遺跡として最大の規模をもち、時代的にも四世紀末から十世紀まで、幅広く、古い順に岩上、岩陰、中期、露天遺跡と三ヵ所の祭場がある。各祭場には、人頭大の礫による石組で祭壇を作り、その祭壇の上に遺宝を並べておまつりをした推定される。

沖ノ島の学術調査において、日本古代祭祀の姿を明確に知ることができる。



話題の新車をみる (六)
スバル・レオーネ四WDの巻

周知の如く、富士重工は、旧中島飛行機以来の伝統に基づき、流行する力強い走破を始め、一般路に左右されぬユニークな技術方式をしばしば開発してきた。

今回は、スバルレオーネ四WDについて紹介したい。此の車は、エステートバン一四〇〇DLをベースに開発され、新設計のEA六三型エンジンが搭載されている。乗用車の居住面と、ジープの実用面を兼ね備えたもので、云わば「ジープのビューティフル一派」に属すべきもの。

最大の特長は、悪路・雪道に対しても、一般路を軽快に走ることができることである。

一般走行時は、フロントドライブの二輪駆動という風変わりなシステムを採用しているが、悪路や雪道などの走行時には、センターデフロックレバーを操作することにより、前後輪に均等に駆動力を配分し、四輪駆動に切換えることができる。

駆動時には、中央のグリーンランプが点灯するしかけ。

機動力は申しぶんなく、草原から砂利道・湿地・急勾配の上り坂まで、縦横無尽に走れる、器用な車である。

ライバーとが元気な若者にアピールするものと思われる。

ともあれ、自動車としての使われ方という面で新しいジャンルを狙ったもので、これまでのクルマには思いもつかなかった用途が期待されるクルマである。

ライトバンだけでなく、セダンタイプができると面白いと思うのだがどうであろうか。

スバルレオーネ四WD主要諸元、全長四〇〇〇㎜、全幅一五〇〇㎜、全高一四五五㎜、車重九〇Kg、最高速度一四〇Km/h、登坂能力tanθ二〇度四八分、最小回転半径五・五m、水冷水平対向四気筒OHV、エンジン総排気量一三六一cc、圧縮比九・〇、最高出力七〇PS／六〇〇〇rpm、燃料タンク容量三二ℓ、ドライブセレクターによる前二輪又は四輪駆動方式。

宗像と平家

神郡宗像は宗像宮を中心に展開する平家盛衰の探索が厳しく、金一千貫を賭けたので、前国宗像一の宮（田島宮）へ供人の絵姫と共に豊前国英彦山から筑紫では、本県他地域に勝るとも劣らぬものがある。今日平家ブームに沸く折柄「宗像と平家」について発見された史料によりその概要を紹介することにする。

安徳天皇は寿永四年（又治元年西紀一、一八五年）三月廿四日平氏一門の壇の浦敗戦と共に三尼時子（清盛の妻）が懐いて水没御の事は衆知のことと思う。平家一門もこの戦にほとんど戦死又は自殺して海底に沈み滅亡したが、その余族で生を全うし他国の再挙を期して深山幽谷に身をかくし源氏の目を避けんとしたことは、肥後の五家荘、阿波の祖谷、薩摩の大島、日向の椎葉などの地は、その隠家として、広く知られていて、その他枚挙すれば厭ない史実伝説が伝っている。

宗像では新中納言平知盛の末裔子又は猶子（兄弟の子）といわれる平信盛が平野親王光盛の息女月壇の浦敗戦後は平家残党の探索が盛綱は花田勘兵衛と改名した。

たまたま鐘山（釣山）に金価のあることが分り、これが採掘に従って危く、当時平家で豪勇を誇る平盛綱、金剛丸鉄石らに護られ夜陰にまぎれて脱出し、宗像で深山の間ふ高い孔大寺山の権現の社が対策に騒然とし、ここに義仲の社にとどまること二十余日の或日のこと北条時助（又春助ともいう）という剣術師範の人物が逗留している。衰相はじめ平氏に対し、九州諸豪族の動静も激しくゆれ動き、信盛一党も英彦山の地では安住もおぼつかなくなった。元来信盛が京より豊前国と時の城主豊前守平長盛を頼って西国に下ったのが、寿永元年三月廿五日で、英彦山の麓に居住した。時に信盛十六才、月の給十五才であった。

信盛は平氏滅亡後、宗像大宮司の養子縁組を心よく納れてくれ、ここに親子の契を結んで、信盛主従は安堵して生計を営むことができた。その後時助が行年六十五才で逝去すると信盛は井上五郎大夫、池田村釣山の村長となり、郷民はこの井上家を奉行又は代官と称したという。その後大賀と改名し、信盛より八代目大賀惣右衛門の世には極めて繁栄して勘定所も設置され、酒、醤油、結髪、風呂屋など千戸を数える鐘山町ができ、遊女屋もあったという。

ことに領主の支配下の金山として、金掘用に各地から来たといわれている。大賀の世になって、禁裏より氷野の唐子を名のるよう仰出された。後世寛文年間（一六六〇年代）盛綱死去して後家のまつが他出して留守に次を発し、宝物、什器悉皆一切焼失して、さしも殷盛を極めた鐘山部落も滑と帰し、部落民も四散して寒村と化した。よってその跡に尻口の地蔵（現存）を安置したので、その後火災は一度も起らなかったという。昭和の初期ころは金掘採取の石日は附近一帯に大小となく散在していたが、

今日僅かにその幾つかを見るのみとなった。信盛の子孫は水野と称し、池野村釣山に今日十三家を数え、信盛夫妻の墓石は九州産業遺産として往時の落魄の面影をとどめている。

信盛夫妻の墓所は初め石塔山にあったが洪水のため現没した。で明治廿一年十一月水野家一党が協議の上コウモリ峠に移し、墓石も永年の風雨に表面の刻字も磨滅したので、新しくその面刻名し、天蓋石と台石のみは入百余年の寂影をとどめている。

久留米工業学園
短期大学助教授
田中　政喜

宗像伝説　其の二七
玄海の一ッ火（下）

当時幕府は対外的警戒の政策から、航海貿易の取締りを強化した。このため徳川時代を通じて名ある商人の処刑されたもの多く、大阪の淀屋辰五郎が豪奢、越後の銭屋五兵衛の三男が磔刑、長崎の末次平蔵が流罪。最も悲惨極まる処刑が黒田藩に捕縛された紅毛人の情報を知る九州の豪商達は、黙視し得ず進出対抗したのである。そして博多では密貿易を理由として空前の惨刑が行われ、伝え聞く近郷近在の人々までを泣かせた。その苦酷さは直訴の佐倉宗五郎や宗像の菊姫の哀話でも比較にならぬほど、名状し難い悲劇の極であったと伝えられる。

時は寛文七年九月、藩主は光之、藩政の重役は花平左衛門兄弟、幕府迎合主義を顕現して幕府の隠密に対し数を良くするのが目的か、鉱山を経営した海陸の大事業家の名勢威を憎悪したか、その真犬財産珍宝を没収したい強慾的意図に発したか、いづれにせよ事件後に流布された風説は閉塞され、その後、三十八年に当社宝物館が建設されるに当り、郷土館に寄贈された、永く館内に飾られていたが、二十五年頃郷土館は閉塞され、その後、三十八年に当社宝物館が建設されるに当り、郡内文化財共同蔵庫としての立場から、当社が郡町村長会から保管を委任されたのである。

この度の宗像展を機会に郷土の生んだ偉大な宗教家、中村研一画伯の偉業を偲び、衷心より謝辞を呈するものである。

写真は村村画伯の遺作「足柄」マルタ島港

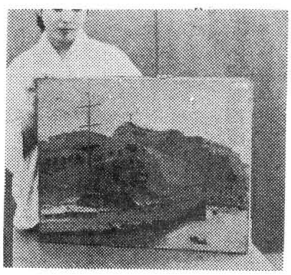
郷土の画伯
中村研一遺作展
―福岡文化会館で―

我が郷土宗像の生んだ日本洋画界の重鎮、中村研一画伯の全生涯にわたる遺作展が、十一月八日から十一月二十六日まで福岡市の県文化会館で開催されている。

中村画伯は昭和四十二年、七十二才で逝去されたが、その生涯を通じて個展は美校卒業の年に一回開かれただけ、今回の遺作展も没後五年目に初めて企画されたもので、その輝やかしい業績と名声に比し画壇は甚だ淋しいことであり、大きな話題と反響を呼んでいる。

同展には油絵七十八点をはじめ水彩、素描、九谷焼絵付など総数百十八点の作品が展示されているが、昨今氾濫の抽象画とは異ってそのカテゴリックな具象絵画は、我々日本人に素直に訴えるものがある。特に油画は素晴しく、写実の適確さ、美事な人物の把握力は見る人を圧倒し、息をのむ思いである。また、静物、風景画にも独自の画趣を持ち、明快で力強い独特の画風は、多くの人々の共感を呼び、会場は、連日老人から若者まで幅広い世代の観覧者で賑わっている。

中村画伯は明治二十八年五月十四日、宗像郡南郷村光岡（現宗像町原町）中村富二郎氏の長男として生れた。中村家は、庄屋をつとめた程の名家であった、父は東京帝国大学工学部を卒業し、住友本社の鉱山技師長となった人である。



画伯には三人の弟と四人の妹があり、鉱山技師の父は研鎖磨の一字をとって男子の名に付けている。即ち、研一、琢二、錬三、磨雄四である。次弟の琢二氏は、兄研一氏と同じく洋画家の道を進み現在、一水会の運営委員で日展理事として活躍していられる。

画伯は明治三十九年宮田尋常小学校（南郷小学校）を卒業して東郷高等小学校（中央小学校）に進み、更に県立中学修猷館に入学、ここで早くも天才の画才を大いに発揮されるが、同好の士に児島善三郎氏（独立美術協会創立会員、故人）や、太田清蔵氏（現東邦生命会長）が居られる。中学卒業後美術学校進学を望まれたが父の反対により難航、然し進学の決意は固く遂に希望は叶えられるが、謹厳実直な父は、画家志望を許すにあたって、決して裸体だけは書くなという条件を出されたという。

優秀な成績で美校を卒業後、六ヶ年に亘りパリで画業に精進、昭和三年帰国以来、帝展、文展に次々に話題作を発表し、帝展最高の帝国美術院賞をはじめ、数多くの特選受賞の栄誉に輝き、また連続して官展の審査員として重きをなしておられた。戦後は武蔵野のおもかげを留める都下小金井に在って、戦後美術の変動に同調することなく、ひたすら独自の手堅い写実に徹し中村芸術の完成に専念された。また永らく自展、新日展の審査員の要職にあり、文字通り画壇の重鎮として活躍されたことは周知のとおりである。

ところで、当社にも村村画伯の油絵が一点大切に保管されていたが、地中海の英領マルタ島を背景にして軍艦「足柄」を画いたもの。これは、今上陛下が皇太子時代に大正天皇の名代として英国皇族冠式に参列された折、画伯も御召艦「足柄」に同乗、マルタ島に寄港した時のスケッチである。この絵は昭和十三年九月、宗像町の郷土館に寄贈され、永く館内に飾られていたが、二十五年頃郷土館は閉塞され、その後、三十八年に当社宝物館が建設されるに当り、郡内文化財共同蔵庫としての立場から、当社が郡町村長会から保管を委任されたのである。

この度の宗像展を機会に郷土の生んだ偉大な宗教家、中村研一画伯の偉業を偲び、衷心より謝辞を呈するものである。

写真は村村画伯の遺作軍艦"足柄"マルタ島港

お露は主家の悲劇と信次郎の失踪に絶望感に襲われた。家人の慰めも何ら効果なく、涙の明け暮れの中に病魔を覚ったのである。

しぐれ降る夜ひそかに病床を脱け出し、厳頭に立っていた。その姿は小左衛門の後を追って投身した直歌と、似たものがあった。一ツ火が玄界を西に走る噂が、しばらく郷人の語り草になった。お露の霊が西に行くと思えた。博多かぶ戸か。

伊藤事件を博多人は口にしない。記録もわざと残さない。お露の悲劇やがて郷人が語らなくなった。玄界の波に朗々外なし。

×

×

宗像大社歌会
俳句作品集（二八）

大井　安部　重郎
遺憾やわらべにかえる秋祭

福岡　麻生　初栄
息を返し一人の庭に落葉ほく

八幡　佐藤　孤舟
忌祓ひ祈る海には魚の大群

大井　吉田　和子
秋晴や何処も懸け幟なし

田島　有吉　唐水
酌をする人の手白き後長かな

宮田　来島吉太郎
放生会大鼓の流る極彼方な

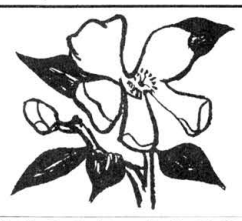
土穴　八尋　恒夫
日続ぜる菊はめられて酒を出し

東京都　小浦　太平
木曽五木焚きつ神の大釜炉

津屋崎　菱花　女
逝く秋の城跡寂びたり虫の声

福岡　入江　柳江
住み慣れて日夜も親しろろ虫

吉留　伊豆　湧泉
鉱石船行き潮海の月見草



沖ノ島

宗像神社沖津宮祭祀遺跡
昭和四十四年度調査報告

十八日は基地撤収を二日後に控え、調査の実質的最終日となるので、各遺跡とも写真撮影、図面とり、遺物と引上げに最後の努力を傾け、四号、二十二号遺跡は全作業を終了した。しかし、終始悪天なため出土品と取組んでいた一号遺跡は結末がつかず、将来に繰り越すことなった。この日NHKの報道員三名が、引揚げの先頭を切って離島した。

十九日、一号遺跡の仕上げを九州大学班が行ない、その他の隊員は一日中撤収準備作業に多忙を極めた。そして一号遺跡を午前中で作業を完了したので、午後からは総員荷造り、運搬にかかった。作業は意外に捗り、迎えの海宝丸に大部分の撤収荷物を積み終ったのは、午後四時すぎであった。

二十日はいよいよ沖ノ島撤退の日、昨晩から入港を予定していたもう一隻の漁船が、風浪のためかまだ到着しないので、遂に沖ノ島住吉中の漁船弁天丸に伝船を頼んで出港することとなった。このため海宝丸、弁天丸の二漁船に最後の積込みを終って、沖ノ島を出港したのは午前八時半頃であった。海上は大変のウネリと波風が強いが、何れも航路の左後方から来ているので、大した波乱もなく十二時半神湊着、直ちに辺津宮において厳粛な報賽祭が行われ無事今回の任務を完了した。そのあと、一同五月祭に行き、神社心づくしのすき焼きに舌鼓をうって、思い思いに別れていった。

岡崎隊長は直半、大島に滞在、大島における遺跡の一般調査にあたった。申津宮の宗像清文氏、大島村長大島俊雄、および大島村漁協佐藤十里氏らの御協力を得、全島を調査、島の中央にある御嶽（海抜二七七m）山頂の御嶽宮に参拝する。参拝の後、各遺跡を点検し、保存作業の打合せを行なう。その結果、発掘調査は今回で打切るので、次回調査にそなえて宿舎整備、写真撮影のために組んだ鉄パイプの取りはずし、遺跡を入らないようにするための杭打ちと有刺鉄線張りを重点的にやることにした。午後から、各自与えられた作業にとりかかり、井上団平、吉村政義は発電機、揚水ポンプの最終的な点検、他の人は一号遺跡の鉄パイプはずしと、参道沿いに有刺鉄線を張るための杭打ち作業を行なった。

十一日から七日までは予定通りに作業が進み、全員元気に毎日を過した。井上、吉村は引きつづき宿舎周辺の整備と機材の点検を行ない、他は遺跡の清掃と保存作業を継続する。一応仮保存である。

第二回調査ではF号巨岩上に発見された二十二号遺跡に松本雅・橋口達也・弓場紀知・中倉民男が、十八号遺跡に第二次調査で気付かれなかった物が残存している部分の調査を行なった。また二十一号遺跡には小田富士雄・佐田茂・真野和夫・井上団平があたり、ひきつづいて四号遺跡を調査した。

つづく

第三次第四回の調査
（昭和四十六年五月九日～十八日）

昭和四十五年十月の調査で、第三次における発掘は一応おわることになった。沖津宮を中心として磐座にある遺の東に面した祭祀遺跡は北方から順次調査を終え、一号遺跡に至ったのである。一号遺跡もまた全体の三分の一の地区の調査をしたにすぎず、沖津宮西方巨岩の遺跡の多くもまだそのままのこされている。しかし三年にわたる調査と多岐にわたる膨大な量の遺物が出土しており、その整理もすすめなければならぬ。また祭祀遺跡の保存整備の問題がのこされている。時あたかも昭和四十六年三月二十八日、史跡に指定されたのでこの回の調査は保存整備のための社殿附近と各遺跡の清掃をやり、修合への道沿いに有刺鉄線を張った。二十二号遺跡は調査の時、築壇の復原を行なったが、今回もこれと石組みも調査時のままのこされていた。

十二日には松見が一号巨岩下の十五号遺跡で伽製鏡を発見した。この鏡の取り扱いについては岡崎隊長とも話合いの上、出土状況の図面、写真をとり、今回持帰ることにした。

十三日、保存作業は終了し十四日からは全員で器材の撤収と宿舎の後片付けを行なう。

十五日には岡崎隊長以下、福岡県文化財技師、宮小路、水藤氏、スタッフが沖ノ島に到着、十六日には各遺跡の最終点検が終り、いよいよ離島準備にとりかかる。十七日午後二時四十分、沖津宮で調査終了の報告祭を行なう。

保存作業は松見副隊長、井上調査員を中心にすすめたが、この間、岡崎隊長、黒野は大島で、村長木田弘治氏、漁協代表吉川俊枝氏をはじめ、長年大島をもまもってきた大島村民の方々と懇談、福岡県文化財技師宮小路賀宏、水藤真氏より今回沖ノ島が史跡にされた理由およびそれにともなう措置について説明があり、指定や保存問題について協議がもたれた。

十八日朝、沖津丸、協栄丸の二隻の漁船で沖ノ島に到着した第三次の調査もこれで終り、全員感慨深い気持で島をあとにした。

一、調査地域の選定・構成
調査地域の選定

前回までの調査にひきつづいて、昭和四十五年度に行なった調査によって、あらたに二十号から二十三号までの所在の祭祀遺跡と、四号遺跡下層に縄文遺物の包含層が確認された。

第二回調査ではF号巨岩上に発見された二十二号遺跡に松本雅・橋口達也・弓場紀知・中倉民男があたり、ひきつづいて一号巨岩上の十八号遺跡（第二次調査で気付かれなかった物が残存している部分の調査を行なった。また二十一号遺跡には小田富士雄・佐田茂・真野和夫・井上団平があたり、ひきつづいて四号遺跡を調査した。

つづく

二宮佐天荘主人
四島一二三伝
――原田種夫著――

第四章　渡米まで

渡米しようという決意が四島青年の胸の底に生じたのは、おそらく、高等英語等小学校に在学中のことであったと考えられる。高等英語等小学校を修了して何目かに四島青年は、アメリカに渡りたいという希望を久五郎氏に洩らしたことがあった。もちろん一言のもとに拒否されてしまったのだ。

「そんな遠い毛唐の国に行ってどうする気か。誰一人知った者も居らん異郷に行く奴があるものか。帰りたくなってもすぐに帰れる処ではないぞ」

と久五郎氏はいった。昏親のミエさんも大きくうなずいていった

「その通りだよ。もしかお前がひどい病気や怪我をしたってすぐには行けんじゃないかね。第一、言葉も通じない処だし、そんなところへ行かんでもええではないか、働くところはいくらでもあるのに……」

「毛唐の国に行かんでも、ちゃんと一人前の男になれる。心がけ一つじゃよ。馬鹿なことを考えるな、おれも母さんも絶対に反対じゃ」

きびしい口調であった。取りつく島がなく、つき放されてしまったのである。

だが、そんなことでくじける青年ではなかった。しかし、渡米が駄目なら東京に出ようという気になって、久五郎氏の友人をたずねて十八円借りたことがある。というのは、明治十年、西郷隆盛を主将とした西南戦争のころ、西郷札でもうけ、今は上京して豪勢な生活をしている人があった。その下で働こうと考えたのだ。西郷札と郷札で、寒冷紗を二枚合わせ、その間に紙を挟んで堅固にしたものだ。十円、五円、一円、五十銭、二十銭、十銭の六種、発行総額は十万円を下らない。額面の大きいのは信用がとぼしく、小額のだけ西郷さんの威光で通用した。薩軍が延岡で見切って鹿児島に退却すると信用が地に墜ちたため目向地方の所有者はひどい損をした。乱後、損害賠償を政府に申請したが、賊軍発行の紙幣なので用いられなかった。

四月薩本に敗れ日向に転戦するに及んで鹿児島との連絡が杜絶したため、ついに六月になって不換紙幣を発行した。これが世にいう四郷札で、寒冷紗を二枚合わせ、その間に紙を挟んで堅固にしたものだ。十円、五円、一円、五十銭、二十銭、十銭の六種、発行総額は十万円を下らない。額面の大きいのは信用がとぼしく、小額のだけ西郷さんの威光で通用した。薩軍が延岡で見切って鹿児島に退却すると信用が地に墜ちたため目向地方の所有者はひどい損をした。乱後、損害賠償を政府に申請したが、賊軍発行の紙幣なので用いられなかった。

東京の人がどうして西郷札でうけたかあきらかでない。いずれにしても、その人の下で働こうと思ったことは事実だが実現しなかった。

渡米しようという希望を両親の烈しい反対にあってくじかれた四島青年は、一時はショックでげっそりした。しかし、そんなことで挫折する人ではなかった。よし炭鉱で働いてお金をこしらえ、それをもって渡米しようと決心をした。もちろん、両親に対する気がねもあったろが、四島青年は鯰田炭鉱の炭鉱夫となって、一日目給二十銭をもらうことになった。その頃の炭鉱といえば流れ者が多く、喧嘩っぱやい荒っぽい連中ばかりで殺伐となっていた。飯場はまた納屋になっており、一つの納屋に二、三十人ずつ寝泊りをしていた。そこでは酒を飲み、花札はくちをやり、酔えば流行歌をどなり散らしていた。

どうして四島青年が炭鉱を思いついたかといえば、明治二十七、八年の日清戦争がもたらした炭鉱景気は石炭の需要増大にめぐまれ、炭価も一トン当り、六、七円にもなり、多くの炭鉱業者はこの時期に大きくふくれ、炭鉱も全盛に成長していったからだ。

〈納屋がしと（四斗）つきゃネズミがこと（五斗）つくかが毒つく
寝正月

という古い民謡があるが、不景気のころは歳の餅がつけない家庭も多かった。それが石炭景気になると採用が一変し、まばらだった納屋造りの鉱夫納屋が、坑口に近く増築され、それでも足りずに、段々島のように、山のあっちこっち、小さな丘やボタ山の上にも無計画に建ちならんだ。四島青年が炭鉱夫になったのは、そういう時代であった。

だが、この鯰田炭鉱にはわずか三週間ぐらい勤めただけであった。

つづく

桃太郎の鬼が島退治は単なるおとぎ話か？

脇坂諦憲

最近ではテレビが発達して、子供達が桃太郎の話を、おじいちゃんやおばあちゃんから聞くことが、全くなくなってしまいました。私共が子供の頃は、日本の子供は必ずこの話を聞いて大人になったものです。日本人で桃太郎の話を知らない者は一人も無いですが、さてそれが何処で起った話なのか知っている者は一人もありません。これはどうしたわけでしょう？

この物語は日本に侵略が起ったときのことで、侵略者はアーリヤ人種であります。紀元前千四世紀頃、アーリヤ人種は中央アジアから東進して黄河を下り安陽（アンヤン）に達し、ここに殷という国を造りました。そして紀元前十一世紀頃即ち今から三千年位い前に、山東半島から朝鮮に渡り、南鮮を占領して対馬に進出しました。これに対して日本は崇像に第一線防衛司令部を置き、この敵に対処しました。即ち神湊・大島―沖ノ島を結ぶ線が本土（大和）防衛の第一線でありました。天孫族が大島の防備についたことは古事記にも見えております。沖ノ島及び大島には監視所があったのですが、さてそれが何処で起った話なのか知っている者は一人もありません。これはどうしたわけでしょう？

桃太郎の鬼が島退治の物語はこのときのことで、鬼とはアーリヤ人種を指しており、アーリヤ人種によって占領された対馬を先ず島とんだわけであります。この対馬を奪回するために、宗像から逆上陸を決行いたしました。高宮祭場はそのときの指揮所であります。

桃太郎の鬼が島退治の物語はこのときのことで、鬼とはアーリヤ人種を指しており、アーリヤ人種によって占領された対馬を先ず島とんだわけであります。この対馬を奪回するために、宗像から逆上陸を決行いたしました。高宮祭場はそのときの指揮所であります。物語では鬼を退治して勧旋したことになっていますが、実際は大東亜戦争のときの特攻隊と同様で全員未帰還となったものです。

宗像には百田（モモタ）という姓が伝わっていますが、桃太郎という名はこの百田に由来しているわけであります。古い言葉で忠義の臣のことを股肱の臣と申します。股は日本語では〝ももたに〟です。それで決死隊をモモタとよび、それに百田と漢字を当てたのでしょう。

このとき対馬の敵は宗像をさけて裏に回り、有明海から陸上たのです。勿論、有明海にも守備隊は配置されていましたが、天草が反乱し、島原が主砕してしまったものであります。そして敵は宗像を背後から包囲いたしました。宗像ではこれに対して、周囲に桑（クワ）を仕掛けて防ぎました。桑とは地に穴を掘り、その底に逆木を立て、上に土をかぶせて偽装し、馬がそこを通ると落ちるようにしたもので、いわば現代の対戦車壕のようなもので。桑原という言葉はこのことに由来しているわけであります。宗像ではこれに対して、周囲に桑（クワ）を仕掛けて防ぎました。桑とは地に穴を掘り、その底に逆木を立て、上に土をかぶせて偽装し、馬がそこを通ると落ちるようにしたもので、いわば現代の対戦車壕のようなもので。桑原という言葉はこのことに由来しているわけであります。宗像ではこれに対して、周囲に桑（クワ）という姓も伝わっております。これは桑によって敵を防いだ人々です。

対馬は全島到る所から銅剣や銅鉾が出土しており、銅剣や銅鉾を土中に蔵して自己の領土であることを物語っております。津は舟着場のことで、舟着となっていた。飯塚は大納屋であったろが、四島青年は鯰田炭鉱夫になったのは、そういう時代であった。

だが、この鯰田炭鉱にはわずか三週間ぐらい勤めただけであった。

つづく

編輯部より

今月号には、日発鯨業諸明丸船医として勤務されている脳反論文の寄稿を掲載しました。氏は中外日報に先頃「エボハは阿弥陀仏？」等のユニークな論文を発表されています。

三面の「宗像と宗家」を執筆いただいた田中政喜氏は、以前宗像氏に七年余り在住され、宗像郷土史に造詣深い方です。今後氏の逸聞に御期待下さい。

宗像の防備については卑しむ迄もなく天孫族であります。しかしこの時代は天孫降臨に先だつこと四、五百年も前のことです。一体これはどうしたわけでありましょうか。また有明海から陸上した記日その後どういう経過を取ったのでありましょうかこれらのことについてもっと深く研究する必要があります。

（おわり）

（医学博士、船医）